様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月２４日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００７～２００９
課題番号：１９５２００８０
研究課題名（和文）「聖なるもの」と文化―世俗的モダニティの思想史的分析

研究課題名（英文）A Historical and Philosophical Approach to Discourses on 'the Sacred' and Culture in the Secular Modern West.

研究代表者
鏑木　政彦（KABURAGI MASAHIKO）
九州大学・大学院比較社会文化研究院・准教授
研究者番号：８０３３６０５７

研究成果の概要（和文）：本研究は、世俗化が進行する西洋後期近代において「聖なるもの」と文化の関係がいかに理解されたのかを、ドイツ近代の思想家―ジンメル、カッシーラー、ティリッヒ、ベンヤミン―の分析を通して明らかにした。これらの思想家は、立場や方法の相違にもかかわらず、分化した諸文化一領域としての宗教と、その根底にある宗教（あるいは神話）という二重性の枠組みで「聖なるもの」を捉えた。この認識は、後期近代における文化的共同性の特質を捉えるために不可欠の視点を提供し、世俗化と脱世俗化の相反する現代の動向を理解する手がかりとなるものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to clarify the concept of the sacred and its relationship to culture in the secular modern West through analyzing discourses of G. Simmel, E. Cassirer, P. Tillich, and W. Benjamin who were confronted with the crisis of the late modernity. Despite of the differences of their world views or philosophical methodologies, they all grasped the sacred in the double perspective. The sacred is arranged for one cultural religious field that is differentiated from myth, philosophy, and politics etc. on the one hand, and for the ground of all cultural fields which is called true religion, the religious, or myth on the other hand. Their conception of the sacred will be a key to understand the dynamic process of secularization and desecularization in the late modernity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	500,000	150,000	650,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1820,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：社会思想史、政治思想史、宗教、文化

１．研究開始当初の背景
（１）原理主義などの「宗教の復讐」が世界各地で観察されるなかで、世俗化としての近代に対する見直しが必要とされていた。

（２）その見直しのために、政教分離など近代世界における機能分化した文化的諸領域の関係性を捉え直すことが求められていた。

２．研究の目的

（１）現代思想の源流となる１９世紀末からワイマール期にいたる時期の哲学者・神学者による「聖なるもの」と文化に関する言説を分析し、両者の関係の理解を解明する。

（２）上の解明をもとに、近代文化における「世俗化」とそのもとにおける「文化」概念の意義を政治思想史の観点から考察する。

３．研究の方法

（１）宗教に関する多様な立場をとる思想家の「聖なるもの」と文化に関する言説の比較検討を行う。

（２）キリスト教神学、哲学、社会思想・政治思想の学際的な領域に積極的に関わり、多様な分野の研究成果を取り入れながら、本研究の観点から再構成する。

４．研究成果

（１）西洋思想史における宗教とその他の諸文化領域との関係を把握するための基準点として、アウグスティヌスの『神の国』の解釈を通し、人間の共同性に関する西洋政治思想史における特徴的な理解を解明した（〔図書〕①）。

西洋近代における「宗教」概念、近代社会の特質を反映した、ある種の「偏向」を伴う概念である。その特質を解明するためには、むしろ異なる時代の類似概念を検討することが有効となる。そこで、近代以前の「宗教」概念、あるいは「宗教」的構想の特質を把握するために、本研究は、社会哲学や精神分析の成果をふまえつつ、「共同性」という観点から、アウグスティヌスにおける「神の国」と「地の国」の再把握を試みた。

共同世界とは、それを成り立たせる媒介の相違によって、二つに分けられる。一つは、身体に媒介されたパーソナルな共同世界であり、もう一つは、モノに媒介されたインパーソナルな世界である。宗教とは、この二つの共同世界を媒介する観念や行為の体系と理解することが可能であり、それぞれの歴史的文化的世界の特徴は、この媒介の性格の違いによって区分けすることができる。先行研究がすでに解明しているように、アウグスティヌスの「神の国」の構想は、古代ギリシアの政治論とともに、西洋世界を特徴づける共同性を表現するものとして読むことができる。すなわち、古代ギリシアの政治論が政治秩序と人間の道徳的完成を結びつけて考えるのに対して、アウグスティヌスは、神の国と地の国を区別することによって、現実の政治秩序と魂の完成とを結びつける古典古代の宇宙論的な秩序を放棄する。そのうえで、人間の救済を歴史の秩序へと移しかえ、堕罪から最後の審判へと至る神の摂理に導かれる歴史を通して人類は救われるとみなされる。このような宇宙論から歴史哲学への移行の思想的な意味を、本研究は、アウグスティヌスとマニ教との比較検討によってさらに深く追究し、キリスト教が共同性の倫理的媒介の契機を重視する所以を明らかにした。

（２）「聖なるもの」と文化という研究課題は、（１）の研究を通して、近代において諸文化領域に分散された共同性がどのように理解され、またその再統合がいかに構想されたのか、という課題として捉え直された。そこで、「共同性」の諸文化領域への分化と再統合という観点から、ゲオルク・ジンメル、エルンスト・カッシーラー、ヴァルター・ベンヤミン、パウル・ティリッヒについて考察をした（〔図書〕②、〔学会発表〕①、②、〔その他〕②）。

①　まず〔図書〕②（および〔その他〕②）では、共同性の媒介の形式を＜型＞という範疇から捉え直し、この観点からジンメルとカッシーラーの思想がどのような特徴をもっているかを考察した。神話学によれば、諸文化領域の分化はたんなる近代の産物ではなく、「枢軸時代」から確認される古くからの過程である。このような神話時代からの分化過程は、「全体」と「個」との媒介形式（（１）で「共同性」と述べていたもの）を変化させた。この媒介の形は、集団の側からみた場合、集団的アイデンティティの＜形式＞と、個人の側からみた場合、市民の＜型＞と定義できる。このように用語を定義した上で、近代における＜型＞の特徴を理解するために、まずはカントを考察した。『純粋理性批判』と『実践理性批判』は、理性の形式を重視する概念的普遍的な思考によって個と全体の媒介を志向する。それに対して『判断力批判』は、身体的・感性的な多様性を一つの形象にとりまとめる構想力によってそれを志向する。歴史的世界に生きる市民が何らかの具体的な模範や礼法を身に着けることによって全体と個の媒介に関わるのだとすれば、＜型＞は単なる概念的思考ではなく、構想力に関わるものと位置づけることができる。

以上のように、＜型＞論の観点からカントの位置を再解釈すると、ジンメルとカッシーラーの思想を、それぞれのカント論から比較検討することが可能となる。ジンメルは、カ

ント思想の解釈において、構想力よりも概念的思考に重点を置き、「主知主義」と解釈する。このようにカントを解釈するジンメルにとって、近代とは世界像の主知主義化によって特徴づけられるのであり、それは多様な生の狭隘化を意味するのである。ジンメルは、このような近代の限界を、自身の「生の哲学」あるいは「社会学的美学」によって克服しようとする。しかしジンメルは、スタティックな形式である文化と、ダイナミックな過程である生との間には常に葛藤が生じると考え、それを文化の悲劇とみなした。つまり、文化的形態は、個と全体とを安定的に媒介することはできないのであり、両者の媒介は、折々の美的形象において留め置かれるものなのである。こうしてジンメルは、モダニズムの時代における共同性を、美的な断片に静態的に留め置かれるものとみなしたのである。

これに対してカッシーラーは、このようなジンメルを文化的形象を否認する「神秘主義者」と批判した。ここには、ジンメルとは異なる、カッシーラーのゲーテを媒介としたカント解釈がある。すなわち、カッシーラーはカントの生産的構想力を拡張し、現実を精神の創造的な形成作用の所産とみなす。カントを主知主義と解釈するジンメルの枠組みでは、生と文化は分断され両者の葛藤が問題となる。それに対して、カントの構想力に注目するカッシーラーの枠組みでは、生と文化は「繋がり」のあるものと理解されている。この繋がりを基礎づけるのが、認識におけるカテゴリーと同じように働く、諸文化領域におけるシンボル形式である。

本項の冒頭において「「聖なるもの」と文化という研究課題」を捉え直した「近代において諸文化領域に分散された共同性がどのように理解され、またその再統合がいかに構想されたのか」という課題に対して、カッシーラーの思想はどのような意味をもつのか。それは、諸文化領域の分化と再統合を同時に基礎づけるものと言うことができる。特にカッシーラーの論じる「シンボル意識の病理学」は、統合なき分化を、ジンメルのように文化の運命として捉えるのではなく、「シンボル意識の病理学」によるものと考えるが、カッシーラーのこの着想を本研究は、近代における「聖なるもの」と文化の関係を理解するだけでなく、実践的な場面で「診断」をしていくために、再評価すべき思想的遺産であると主張する。

② 次に、〔学会発表〕①によって、上の研究をさらに展開した。カッシーラーと前の世代のジンメルを比較した〔図書〕①とは異なって、〔学会発表〕①は、カッシーラーと後の世代のベンヤミンを比較した。これによって、ジンメル、カッシーラー、ベンヤミンという十九世紀末からワイマール期にかけての、異なる世代の思想家における「聖なるもの」と文化に関する議論をフォローしようとした。本学会発表をもとに書き改めた論文（未発表）では、次のような成果を得た。すなわち、初期から存在したベンヤミンの神話への関心は『言語一般と人間の言語について』(1916) において歴史哲学的な形態をとるに至り、そこから人間の文化的活動に対する神話批判的な批評が生まれ出る。すなわち、ベンヤミンによれば、人間の諸活動は、言語によって行われるものである限り、そこに神話が入り込む。ベンヤミンにとって神話は、被造物の本来の世界の堕落形態を正当化する虚偽であり、それを批判する地平の獲得は、名という純粋な言語の取り戻しによってのみ可能となる。このような神話批判のモチーフが、ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』におけるアレゴリー論の背景をなしている。すなわち、ベンヤミンにとってシンボル概念は堕落後の世界の神話化されて、現実聖化へと堕落した。そこで、現実聖化に陥らずに、神聖の絶対者を志向的に指示するアレゴリーが高く評価されることになる。『ドイツ悲劇の根源』はこのような神話批判論として解釈することができる。

ベンヤミンの神話論は、ドイツ初期ロマン派のシンボル論やゲーテの原現象から発想を得ている。この点で、同じくゲーテから強い影響を受けたカッシーラーとの異同をさらに究明することが今後の課題である。

③ さらに、〔学会発表〕②は、カッシーラーと神学者ティリッヒにおける「宗教」概念と政治神話批判を比較する試みである（本報告は、その後改稿し雑誌『日本の神学』第 49 号（2010）に発表される。）。本研究が明らかにしたことは、カッシーラーの宗教概念は、一方では機能分化する諸文化領域の一領域に位置づけられながら、他方では神話的由来から切り離されることはないものとみなされており、その両義性の緊張によって特徴付けられることである。それに対してティリッヒの宗教概念は、諸文化領域の根底に位置するものであり、カッシーラーの神話に似た位置づけを受ける。このような違いは、宗教的実在を人間のシンボル形式から説明するカッシーラーの「批判的観念論」と、宗教的実在は人間の能力によって捉えられるのではなく、むしろ人間が宗教的実在によって捉えられると考えるティリッヒの「超越的実在論」との相違に由来する。この相違は、それぞれの宗教に対する立場の違いを反映するものであるが、しかし諸文化領域を貫くような地位に神話と宗教とを位置づける二人の議論は、近代社会における「聖なるもの」と文化の関係に対する核心において共通する

認識を示したものと理解することができる。「聖なるもの」は宗教という一領域とともに、諸文化領域の根底という二重の枠組みに位置づけられるのである。

（１）でも述べたように、共同世界とは、それを成り立たせる媒介の相違によって、二つに分けられる。一つは、身体に媒介されたパーソナルな共同世界であり、もう一つは、モノに媒介されたインパーソナルな世界である。宗教とは、この二つの共同世界を媒介する観念や行為の体系と理解することが可能であり、それぞれの歴史的文化的世界の特徴は、この媒介の性格の違いによって区分けすることができる。諸文化領域への分化によって特徴付けられる近代は、共同性をパーソナルなものとインパーソナルなものに区分し、宗教を前者すなわちパーソナルなものの媒介に特化させた時代ともいえよう。しかし、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての近代ドイツ思想史では、上述のように、宗教は特定の宗教的領域として領域化されるだけでなく、諸文化領域にまたがる共同性の媒介の基底にあるものとみなされる。すなわち、一方では一文化領域のスタティックな形態、他方では諸文化の根底のダイナミックな基盤とみなされる。ジンメルやティリッヒにおいて「聖なるもの」はこれら二つの次元をつなぐ動的なものとして理解されており、この動的過程において生成されるものが文化である。「聖なるもの」は近代的な領域化を突破して、諸文化領域にまたがる共同性の媒介として位置づけられる。これは、ベンヤミンのように、地上の共同性を聖化するものではなく、むしろそれを徹底的に批判する役割を果たすこともあれば、第一次大戦期のジンメルのように、戦争による共同性として聖化されることもある。ティリッヒやカッシーラーの理論は、有神論と観念論という異なる立場から、「聖なるもの」と文化の危うい関係性を描き出したものということができる。

（３）〔学会発表〕③では、上の研究成果を活かしながら、研究者が従来から研究対象としていたディルタイと、その影響を強く受けた和辻哲郎の、それぞれの宗教と文化の関係について考察した（本成果は『ディルタイ研究』第 21 号（2010）に発表される）。本研究の成果は、ディルタイの宗教思想を、彼のシュライアーマッハー論を手がかりに「宗教の自律性」「内的経験としての宗教」「個体の思想」という三点から捉えた上で、この宗教的生がディルタイの精神科学論における人間的生の理解可能性の基盤に位置づけられていることを明らかにした点である。（２）の研究成果とつなげるならば、ディルタイにおいても宗教は、一方では諸文化領域の一領域としての既成宗教として理解され、他方では諸文化領域にまたがる精神科学的世界を成り立たせる宗教的生として理解されているのである。和辻哲郎に関しては、なお試論的な考察にとどまるが、その解釈学的な文化史の業績には、ディルタイにおける宗教の二元性に似た構図が含まれるといえる。すなわち、和辻が「人倫の深い根底」と名づけるものは、ディルタイの「宗教的生」に相当し、この「根底」が種々の神話や学問の形をとって表現されたものが、「既成宗教」に相当する。このような理論構造のゆえに、和辻は既成宗教の原理主義化（狂信的な国体主義）に対して一定の批判的距離を保ちえたし、他方では「宗教的生」の共同的な範囲を倫理の基盤として評価するために天皇制の擁護の立場を譲らなかったのである。ここにも、近代における「聖なるもの」と文化の危ういがしかし不可避的な交錯を確認することができるだろう。

以上を通じて、本研究は、西洋後期近代（およびその圧倒的な影響をうけ、その一部ともなった日本近代）における「聖なるもの」と文化の関係を分析した。世俗的近代は、聖なるものを排除するのではなく、それを一文化的領域と人間文化の根底的な領域に配置する、独特のシステムを編成したように思われる。近代社会は、実定宗教を絶えず反省する「聖なるもの」の再帰性をシステム化した社会とはいえないだろうか。この観点は、世俗化と脱世俗化の動向が交錯する現代の状況をより深く認識するための鍵を提供するものと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計３件）
①<u>鏑木政彦</u>「ディルタイと和辻―文化史の中の宗教」、日本ディルタイ協会、2009 年、12 月 12 日、家の光会館（東京）。
②<u>鏑木政彦</u>「ティリッヒとカッシーラー―宗教の臨界をめぐって」、日本基督教学会、2009 年 8 月 28 日、北海学園大学。
③<u>鏑木政彦</u>「シンボルとアレゴリーの交叉―カッシーラーとベンヤミンにおける＜神話・文化・政治＞序説」、西日本哲学会、2008 年 12 月 6 日、琉球大学。

〔図書〕（計２件）
①<u>鏑木政彦</u>「個・全体・＜型＞―ジンメルとカッシーラーを手がかりに」、関口正司編『政治における「型」の研究』風行社、2009 年、pp. 71ー98.
②<u>鏑木政彦</u>「宗教」、岡崎晴輝・木村俊道編『はじめて学ぶ政治学』ミネルヴァ書房、2008 年、pp. 265ー275.

〔その他〕
①鏑木政彦「書評『トクヴィル―平等と不平等の思想家』」、『社会科学研究』60 巻、第 2 号、2009 年、pp. 279ー281.
②鏑木政彦「カッシーラーとジンメル―文化の葛藤と架橋」、『創文』516 号、2009 年、pp. 37ー40.

６．研究組織
(1)研究代表者
鏑木　政彦（KABURAGI MASAHIKO）
九州大学・比較社会文化研究院・准教授
研究者番号：８０３３６０５７

(2)研究分担者

(3)連携研究者